

—金沢大学サテライト・プラザミニ講演—

日時 平成 12 年 12 月 16 日 (土) 午後 2 時 00 分～3 時 00 分

会場 石川県社会教育センター 2 階 21 号室

演題 「ひと（女性）とひと（男性）共に自分らしい生き方を！」

講師 八重澤（松下）美知子（金沢大学留学生センター教授）

こんにちは。八重澤です。拝見したところ、普段一度はお話をさせていただいた方がとても多くいらっしゃいます。私は心理学の教師になって今年で 25 年目ですが、初めて講義をするように大変緊張しております。お手やわらかによろしくお願いいたします。しかし、学ぶことはしっかり学びましょう。

ジェンダーを初めて学ぶ人のためにということですが、この中には私よりもずっとそういうことを学習されたり、仲間内で検討されたりしていらっしゃる方がとても多くいらっしゃいます。そういう方にとっては復習を。また昨今は「ジェンダー」という言葉が非常に多用されています。そのことについても習得できるようにということで、私自身も今日が初めての講義のつもりで、初心に戻ってやらせていただきますのでどうぞよろしくお付き合いください。

「ジェンダー」という言葉は 90 年代に入って洪水のように押し寄せてきています。私がこのテーマと取り組んだ 30 年前にはこういう言葉は日本にはありませんでした。日本であるグループの人たちが使い始めたのが 1970 年代も少したってからで、80 年代ぐらいからようやく市民権を得ています。私もこの言葉を使用するときにはもう一度本をひも解いて考えたりしますが、まずジェンダーというのは、生後の環境（社会・文化・歴史）の中で形成される性差とあります。これ(資料)を私は昨日、家に帰って夜寝るとき読みなおして、少しまずい、「性差」というと差別・差異・違いというのが入りますから、「性別」の方がベターかなと思いました。だから、性別の総称です。

よく言われるのが「ジェンダー・バイヤス（性による偏り）」ということです。これは性別に関するステレオタイプです。と言うと、友達から電話がかかってきて、「あなた、ステレオタイプってまた分からないわよ」と言われます。簡単に言うと、男性というのはこういうものだ、女性というのはこういうものだというような決めつけです。固定的な決めつけによる偏見、女というのはやさしいものだと。やさしくない女性もいっぱいいます。男というのは頑張るものだと。頑張らない男性もいっぱいいるわけです。ですから、ある



性別などがあるパターンと結びつくのです。例えばこれは県民性でも見られます。石川県はもの静かだと。もの静かな人ももちろんたくさんいらっしゃいますし、そうでない方もいらっしゃいます。そういうのがステレオタイプということで、それがジェンダー・バイヤスです。「なぜ彼は頑張るの」「だって男だから」。こういうのも決めつけ（ジェンダー・バイヤス）です。

「ジェンダー・ギャップ」ということもよく言います。これが一番端的に表れるのが、賃金など性別による男女の格差などです。例えば私どもの大学でも、女子学生が1割にようやく達したか、達しないかというような専攻別の偏りがあります。あるいはある学部に行くほとんどが女性ということがあります。あえてそこに行きたいという方もときどきいらっしゃいますけれども、それももしかしたらジェンダー的な見方なのかもしれません。

「ジェンダー・フリー」というのは、性別にとらわれない考え方や取り組みということです。

私はこのお話の中で「ジェンダー」という言葉を多発させていただきますが、それは「性別に関する」とか「性別による」、つまり、違いや優劣を含まない、ただ性による二分化ということをごここでは話させていただこうと思います。

まず、性差がどうのこうのというのは、100年前までは学問のテーマになりませんでした。科学のテーマにならなかったのです。あたりまえすぎてテーマにならない。簡単に言えば、何で彼は能力が高いのか。だって男に生まれたんだもん。逆に、何であの子はいつまでも何もできないんだろう。だってあいつは女だ。そうした生まれつきのせいとその後のさまざまな行動パターンを決めているのは明らか過ぎて、考える余地がないというような時代がしばらく続きました。ちょうど今から100年ぐらい前までは大体そうだと思うのでございます。

1900年代に入っても1930～1940年代まで、私はちょうど1950年代、ちょうど50年の生まれですから、その少し前までは、一体男性と女性の何がどのように違うのか、性差の測定に対しては大変興味を持たれていました。そこでは当然のように、ここでの考え方を示すような言葉として生物学的性差というのがありました。これは生まれつきのもので、生物学的に男性であるとか女性であるというような問題です。また、社会・文化・心理学的性差というのがありました。私はたまたま心理学ですので「心理学的」と名付けるのですが、これは歴史の人は「歴史的性差」というような、歴史も含めた言い方をされます。もっと簡単にカタカナを使うと、生物学的性差のことはセックスといいます。社会・文化・心理学的性差がジェンダーです。つまり、1930～1940年代までは生物学的性差と社会・文化・心理学的性差がそのまま直結していたのです。もう疑う余地もなく受け入れられていました、人は男に生まれるから男らしくなるのだと。

ですから、そこではいろいろな測定が行われました。興味においては男性と女性がどのように違うか。能力においては男性と女性はどのように違うか。さらには、とてもおもしろい研究があります。最近はそれほど使いませんが、IQ（知能指数）という周知の概念

を發明した方は、心理学の中でも有名な天才児の研究やいろいろなテストを作ったターマンというスタンフォード大学の研究者です。その方がマイルズ先生と2人で、ある1人の人間がどのくらい男性的であるか、どのくらい女性的であるかということ性を度スケールで表したわけです。例えば松崎さんと八重澤美知子を比べると松崎さんは女性度では100とか、美知子は0とか、そういうやり方が当然のごとく行われていました。

ところが、しばらくたってみると、どうもそれに合わないデータ、つまり生まれつきで、変わるはずのない数値の変化が出てきました。非常に素朴な言い方をすると、当時は戦争がありました。そうすると女性は外にひっぱり出されて、今まで男性しかしなかった労働に就くことになります。すると、生まれつきで不変の数値だと思われていた性差が変わってきたのです。あらあら不思議と。その辺はターマンとマイルズ先生はえらいのです。ひょっとしたら性差は環境によって変わるのではないか。つまり、生得的なあたりまえのものを測定しているのではなくて、ここの場面にいたら200、こっこの場面にいたら10、この差はもしかしたら環境が性度に非常に大きく影響するのではないかということを見いだしたわけです。すなわち性差は作られるものであると。

それから、非常にドラマチックなのがお手元の表にあります。それについてはO. H. P. で見ていただこうと思っています。(以下、O. H. P. 併用)

○これは大変有名なマーガレット・ミードという文化人類学者の研究で、1935年の『三つの未開社会における性と性格』という本の中に書いています。ニューギニアの奥地の3部族が近くにいながら、それぞれ独自の文化を発達させたのです。簡単に言えば、アラペッシュからムンドグモールまでが、男性と女性の違いがない文化ということができます。例えばアラペッシュは、これも私はもしかしたらミード先生のジェンダーかなと思いますが、やさしくて親和的なのが「女性的」としてしています。もちろんミード先生は女性ですから。男女関係もそうですが、パーソナリティ特性も特に男性と女性とで差がないのです。それに対しムンドグモールは「男性的」、かなり攻撃的で猛々しい。激しい攻撃的な男女の結婚が理想とか、いつもいつも鬭争しているのですが、パーソナリティ特性を見ると、自己を強く主張する(特に女性)、所有欲とリーダーシップへの感情が強い。ここも男女ともに男性的なのです。簡単に言えば、アラペッシュとムンドグモールにはジェンダー・フリーである、ジェンダー・バイヤス、ジェンダー・ギャップがないのです。

さらにミード先生は発見したときに非常に喜んだと私は思うのですが、問題はチャムブリ族です。チャムブリ族の男女関係は、優越的・非個人的・支配的な女性と、無責任で情動的・依存的な男性との結婚で、性的にも男性が従属しています。そうするとパーソナリティ特性には違いが見られます。チャムブリ版ジェンダー・バイヤスです。女性は「攻撃的・支配的・保護者的で活発・快活、」これがチャムブリ版女らしさです。ではチャムブリ版男らしさはどうかかというと、「男性は女性に対して臆病で内気で劣等感を持ち、陰険で疑い深い」。ここで何を申し上げたいかというと、ジェンダーは作られるのだということです。

ミード先生の研究についてはその後いくつかの批判があります。しかし、ほとんど性差の形成というときには、古典としてこの研究は確実に出てくるものです。先程言ったターマンとマイルズ先生の話が1つ、ニューギニアの文化人類学の研究が1つ、さらに少し不思議な現象で、これは最近の「性同一性の障害」にも通じるのですが、1960年代にハンプソンという人が行なった両性性の研究というのがあります。

両性性というのは、生まれたばかりのときには第一次性徴の具合がよくわからなくて、例えば、明確な第一次性徴なら明らかに「この子は男の子ね」「この子は女の子ね」とわかるのですが、それがわからない例も少しはあります。その子の第一次性徴の具合がよくわからないから、本当は男の子だけど、その子に「花子ちゃん」と付けたとします。ところが、だんだん成長するにつれて、花子ちゃんは男の子だった、あるいはその逆があります。どうもこの子は太郎君らしいから太郎と付けよう。しかしどうもそうではなくてこの子はやはり花子ちゃんだ。その後、もともと持って生まれた生物学的な性に合わせるかたちで育てたけれども、どうも不適応を起こす。

ところがある時点までにもとの性、例えば花子ちゃんと名付けられた太郎君をもともとの男の子に戻すのにうまくいく年齢のあることがわかったのです。大体4～5歳ぐらいまでならばその後うまくいくだろうということが言われていました。しかし、この生物学的な性も本当に男性なのか女性なのかということになると、また最近はこのあたりもずいぶんとあいまいなもので男性性・女性性の領域がわからなくなってきています。ですから、そう簡単に人間の性は決まるものではないと思っています。

こういうことで、性差の形成ということになると、生物学的な性差イコール社会・文化的な性差とは言えない。つまり、どのようなことがその社会の中でのジェンダーを決めるのかということに関心が向いて、今はそういう問いかけがずっとされていると思ってください。性差はなぜ形成されるのかということです。ですから、「女性的な特性、男性的な特性」と、わりあい私たちは簡単に口に出しますが、本当にそれはもともと生まれつきのものなのだろうか。それとも後々の環境の中で作られたのだろうかというあたりから問い直しをしなければならぬかなという感じがします。

性差は形成されるということになると、私たちを作るもの、ジェンダーの形成に関してはありとあらゆる生後の環境が影響してくるわけです。例えば社会・文化・学校というのは、大きく分けると、性別に従った子どもの教育、子どものしつけ、社会的なプレッシャーをあたえます。

○これは「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく育てた方がよい」とする割合の国際比較です。東京都生活文化局の1994年の調査ですが、性別を意識した、ジェンダー・バイヤスのもとになるこうした考え方をやっているのはアジア漢字圏、特に韓国なども多いです。ところが、同じアジアでもフィリピンはすでに男の子も女の子も同じように育てるジェンダー・イコリティ、ジェンダーを同じくして育てた方がいいという考え方です。

フィリピンの女の子たちはかなりの割合で工学系に学ぶ学生が多いのですが、こうしたこともその一因だと私は思います。

あとは、アメリカ・イギリス・フランス・ドイツ・スウェーデンでは圧倒的に「同質に育てたい」というわけです。これはただ数字を見てなるほどというわけではなくて、こうした中で育つことによって私たちの中のジェンダーが形成される、これがその方向性を示すということで大事なのだと私は考えます。

では現代社会とジェンダー、つまり今までのような二分法で何がどのように行き詰ったから、現在、ジェンダー・バイヤスをなくそうという動きが起こっているのかということを見てみたいと思います。

○これが先程出てきた「性役割のステレオタイプ」、つまり性による決めつけです。先程の育て方の裏には、たぶんこういうのが望ましいというような社会的な通念、あるいは慣習があるわけです。これは1967年に柏木先生、早い時期から一貫してジェンダーについて研究をされている、心理学界を代表する心理学者の一人の方の研究です。参考程度にアメリカの例も挙げてみましたが、まずは男性に望ましい特性を見てみてください。(表参照)

それをずっと読んでみますと、ここでは男性は力の主張です。力に関するものが出てきます。今までの歴史的な流れがありますから、まさに力、それは有形・無形つまり目に見える力もあれば目に見えない力もあります。ところが女性に関しては人への配慮や調整というものが出てきます。例えば、おしゃれ、行儀のよい、かわいい、従順な、こういうものが出てきます。

私たちのやり方では、この中で主なファクターとして何があるかというのをやります。これは専門用語では因子分析という言い方をしますが、因子分析でやると、男性に望ましい特性は2つ出てきます。1つが活動性です。経済力のある、積極的な、活発な、意思強固な、これが活動性に関するものです。もう1つは知性に関するもので、理性的、頭が良いというものが出てきます。

これは、今までの私たちの社会、男性を中心に組み立てられた社会の中で自己実現していくためには是非とも必要な資質です。それが男の子には望まれるわけです。男性の特性は非常にたくさん出てくるのです。アメリカでもそうです。これは「etc」と書いてあるのですが、当時、柏木先生は、「むしろ男性的な特性を持たないことが女性らしいのではないか」というようなことを言われたのですが、まさに女性の方はたった1つの因子しか出てこない。美と従順という、社会の中での自己実現とはほど遠いものです。

そんなことを言うと、私もジェンダー・バイヤスの名前をもらっているのかなと思ったりします。女性で「美」が付く人はすごく多いのですが、親は無意識のうちにそう付けたのかなと思います。しかし、もっと違う基準だと私は解釈したいと思っていますが。

こちらは性役割のステレオタイプとしてハイルブランのものを出していますが、ここでも、日本は力ですが、アメリカはもう少し詳しくその力が3分割されている様子がわか

と思います。競争において勝ちたいという優越志向が少し出てきています。それから所有志向です。あるものを持ってコントロールするというようなこと。それから権力志向です。自分の意志を他者に押し付けたいとする権力志向が出てくる。大体日本もアメリカも似ています。不思議なことにこれこそがステレオタイプだと思うのですが、いついかなるときにどこでやっても大体これが出てくるのです。

ある人が新聞批判の中でも書いていましたが、先週、1970年代に日本赤軍にいたとされる容疑者の女性が捕まりました。その人を形容する言葉でどのような言葉が書かれていたかということ、新聞批評する女性が批判していたのですが、「従順で読書好きなもの静かな少女が女闘志に変身するまで」、というのですが何とその形容詞の使い方は、ワンパターンなことか。だれが彼女は従順だと言ったのか。もっと違う言葉の表現はないのか。そんなマスコミの言葉の使い方「少女イコール従順」またこれは再生産、つまり無意識のうちに私たちに伝えられていくのではないだろうかと言っていました、本当にそうかもしれません。

こういうステレオタイプな見方が実は合わなくなっている現実が、私たちのさまざまな不適應行動に出てきています。例えば力を志向する男らしさへのこだわりを考えると、男性は弱くはいけない。感情を抑えなければいけない。我慢をしなければいけない。少しのことで動じてはいけない。そうするとどこに問題が出てくるかというと、これは1993～1995年にかけて中学2年生がいじめによる自殺をしたのですが、そのデータの8割までが男子学生です。

実はこの中学2年というのは発達心理をやっている人から見るととてもおもしろい年代で、ちょうど自覚して社会の中のジェンダーを選び取ったり、自らの性別に対して積極的な態度を持ち始める年代なのです。とすると、そのときに男の子がこれを志向すると破綻が来てしまうのです。さらに、1986年からののちの電話に寄せられる愚痴や悩みは40～50代の男性からが多いと聞きます。男は黙ってとか、大黒柱はねずみがかじったぐらいでは我慢しなければいけないということを身にしみて学習していますから、家族にはなかなか言えない弱音を吐けないという、とても大変な例だと思います。

では逆に女性から見た女らしさのプレッシャーというのは何なのでしょう。これは自己主張できない、挑戦できないということです。先程、紹介していただきましたが、私どもの留学生センターでは、今、世界50か国弱の国々から370名前後の留学生を受け入れています。その留学生の中で、多くの留学生たちが日本の私たちに言う最初の言葉は、「日本の女性は声を出していない」、「かわいらしく見せようとして自己主張をしない」ということです。私たちも知らず知らずそういうふうになっていたのです。いろいろ発言すると「またでしゃばって」、「また生意気」と思われているかなということで、意見を差し控える傾向があります。

しかし、それは何も我が国だけを言っているわけではなくて、とてもいい例があります。それはヒラリー・クリントンの例です。西欧文化圏ではまだまだ根強く「女らしく」

というプレッシャーが出てきています。その中でヒラリー・クリントンは戦うわけです。ヒラリーさんは上院議員として55%の支持率を獲得しました。しかしある新聞記者は、その55%の支持率というのは、(対抗馬への投票という訳ではなくて,) ヒラリーさんを承認してあげるか否かだったというのです。その記事を少しひも解いてみると、『「彼女はとても冷たい人よね。誠実そうでもないしね。大体、何で不倫ばかりするあの人と一緒にいられるのかしら。私は嫌いだわ、むかつくわ」。(デーリー・ニュース) 毎日新聞 11月10日 '00より』これはすべてヒラリー・クリントンに言われた言葉です。簡単に言うと、アメリカは一部では非常にさまざまな新しいものを支持するにもかかわらず、まだまだ依然としてジェンダー・バイアスを温存している保守層が根強くあるのです。例えば、『「有能でクールで強い女がいきなり自分たちの生活に入ってくる。それはいやよ、ハリウッド映画ならばいい』(同上) ということだったのです。

ちなみに、彼女はそういうことをよく知っていますから、あとでまた名前のことも言うのですが、名前も軋轢を生じないようにさりげなく変えているのです。夫が政治家になる前は、彼女は自分の名前をヒラリー・ロダムと言っていました。ところが、夫が州知事になったとき、選挙はある意味ではいろいろな層を説得しなければいけないし、いろいろな層からの支持を得なければいけないので、ヒラリー・ロダム・クリントンと名前を変えたのです。そして最後に夫が大統領になったら、ロダムという名前は消えて、ヒラリー・クリントンになっていました。これはアメリカ国内にはさまざまなジェンダーについての考え方があり、彼女はうまく対処した例だと思えます。

他人事であれば女性が外に出ることは賛成、しかし自分の妻や恋人は、というのはまだまだあります。そうすると何となく女性たちは、そこで敵対したり、いちいち説明するのが面倒くさいから、その人がどのくらいのジェンダー意識があるかということ想定しながら話すことがあります、とりわけ別姓を説明する際には。しかしそれは男性にとっても失礼なことかもしれません。もしかしたら年齢や立場、さまざまなものを超えて一緒にやっぺいこう、共生社会でやっぺいこうという男性がたくさんいて、そういう方にはとても失礼な話ではないかと感じています。

こうしたジェンダー・バイアスに合わなくなってきた例として、日本社会全体の動きがそうです。産業構造の変化、情報化、国際化、いろいろなものがあります。これは簡単に言えば、肉体的な差異は重要ではない。つまり、肉体的な男性・女性の違いに依存する部分が非常に少なくなっている。例えば仕事が好きな男性も女性もいれば、家庭を大切にしている男性も女性もいるということなのに、依然として男性は仕事、女性は家庭という二分化があるところに、それぞれ人々の大変さの問題があるのではないかという感じがします。

しかし、ジェンダーについての問題は長期間にわたってできてきた問題ですから、なかなかわかったようでわからないところがあります。日本ではこの人が比較的有名な夫かなと思う人がいます。それは宇宙飛行士を妻に持った男性、向井万紀男先生です。『君についていこう』の著者ですが、この現象を見ただけでも「まあ何て男が軟弱な」と思うような

方が中にはいらっしやるかもしれません。向井先生は非常に文章がお上手です。あの夫婦はマキオちゃん、チアキちゃんと呼ぶのだそうです。そのチアキちゃんが、もしかしたら自分は宇宙飛行士になれないのではないかととても心配なことを夫であるマキオちゃんに打ち明けるわけです。そうするとマキオちゃんがどう言ったか。そういうやりとりが次のように書かれています。

『向井先生と結婚ということになると心配なことが1つあるんだ。自分の夢を追い続けたい、一生働いていたいという女性の結婚相手は、そういうことに理解のある男性でないとまずいのではないかと思うのよね。でも向井先生は男性と女性は別だっていう差別意識みたいなものがあるような気がするんだ』。今まで自分にそんな差別意識があるのかないのかなんて考えたこともなかったのだが、よくよく考えてみると、私は結構『女のくせに』とか『男たるものはこうあるべきだ』などと言うのが好きなのだ。

また、そのチアキちゃんが「宇宙に行けなかったら」と言うことに対して、マキオちゃんはこう言うわけです。「『全然気にするなって。もしそうなったら千秋ちゃんには俺の専業主婦になるって手だって残されているんだよ。女である分だけ恵まれているんだって』。女房は私の言葉を聞いて寂しそうな表情を見せた。私にはわかった。『私が結婚したこの人はやっぱり何もわかってない』という寂しそうな表情だった。女性だって男性と同じように夢を追い続けることができるのだと思っている女に向かって、言ってはいけないことを言ってしまったような気がした」。

これはもっと一般的に考えて、逃げ道として専業主婦を選ぶというのは少し残念ですね。好きで選ぶのならそれはそれでとても大事な選択だと思いますが、外で働くことが嫌いで逃げたいからというのは、それはあまりにも男性に対しても失礼だし、専業主婦に対しても失礼な感じがします。こんなふうなことで、幾重にも幾重にもこういうジェンダー意識があるということです。

○これも新聞のコラムに載ったもので、やはりジェンダー意識の根深さを示すような例です。こちらの方は資料には載っていません（O. H. P.を見ながら）。年代を少し残したものは、もしかしたらこの問題は年代によってだいぶ違って来るからです。戦前の教育を受けた人、戦後の教育を受けた人の違いというように。これを簡単に言うと、ローカル線に乗って座ったら、前の方に30歳前後の家族3人が乗っていて、亭主の方が子どものおむつの交換を始めた。隣で奥さんが週刊誌に夢中になっている。これも失礼な言い方をしているのですが、「男は慣れているのか、飼いやられているのか」と。これは少しむっとしてきますね。次に授乳も始まったのです。「ここでは男女雇用機会均等法も関係ない。どうして2人が協力してやれないのか。そう思ったのは戦中・戦後を生き残った男の単なる郷愁なのだろうか。折から参院の共生社会調査会が夫や恋人からドメスティック・バイオレンスの実態調査を実施し、被害にあった女性への支援体制を確立するという。それはそれで結構なことではあるが、何か前日の社内風景と重なって複雑な気持ちになる」と。つまり、一緒

にやればいいのに男だけがやっていたと。飼い慣らされている軟弱な男という、そういうイメージなのですかね。



○これに対してこういう反論がすぐに来ました（O. H. P. を見ながら）。もちろんこれは全部男性が書いているのです。これも男性です。子どもが幼かったころ、外出したという話

です。40歳の男性ですが、「外出先では私もよくおむつ替えをした」と書いてあります。「7月29日の本コラムの投書を読んで、そのころの私たちの姿が重なった。おむつを替える夫を憐れに思う人もいるのだと感じ、かえって妻が少しかわいそうになった。」「もし夫がすぐそばにいるにもかかわらず妻が一人で子どもの世話をしていたとしたら、この方はどう思われたらろう。それでも一人で世話をしていることに違和感を覚えられたらろうか。私たちの場合、おむつ替えなどは気がついた方がしていたので、この方が見られたご夫婦も、たまたま夫の方が気づいて世話をしていたのではないかと思う。わずかの時間の出来事で、男女同権も男女雇用機会均等法も関係ないとまで言われると、私としては何とも息苦しく、生きにくい世の中を感じてしまう」。両方に共通してあるのはまさにジェンダーの問題です。ジェンダーが両方のベースにあるという問題です。後者の投書は、たぶんこれからの21世紀の考え方だろうと思います。

さて、今まで話してきたところで、いよいよ最後の一番話したいところの時間がどんどんなくなりますので、「ジェンダー・フリーのための継続的な努力を」ということを少しお話させていただいて、話を締めくくりたいと思います。

ジェンダー・フリーというのは性別にとらわれない考え方や取り組み、つまり性別ではなくて個人差です。そのような考えをアメリカでは1960年代の半ばごろにもう言っているのです。言ったのは例のベティ・フリーダンという女性です。私は彼女の本を最近でも読んでいますが、ここまで既に40年近く経っていてもまだまだジェンダーにはいくつかの偏見があります。

やはりジェンダーは根強い、ジェンダー・バイヤスは根強いとずっと私は思い続けていることがあります。私が今日ジェンダー入門講座をやると言ったら、何人かの人が「それは困るよ、ジェンダー・フリーなんてワガママな女が言っていることだ」と言われたものを少しだけ紹介します。

1つは、ジェンダーについての偏見なのですが、「女性の社会進出はよいが、子育てはどうしてくれるのだ」という意見があります。（会場から笑い声）もしかしたら笑われた方はすでに答えを知っていらっしやるかもしれない。この答えはあとで申し上げます。

それから2番目に「男女の違いがあるのはあたりまえでしょう」と。それはあたりまえです。そんなことを別にだれもなくしろと言っているわけではありません。ただ、こういうふう置き換えた方がいいと思います。生物学的な性差があるのはあたりまえですよ、別にちっともおかしいことではないでしょうと。

それから、専業主婦が大量に生み出された時代に、少子化が進展したのはなぜか。むしろこのときはかなりの子どもが中絶されています。非常に世の中がよくなった時代ですが、中絶したのは家庭の奥さんが多いのです。今日はそこまで手をつけることができませんけれども、その辺はまだどこかであらためて勉強させていただきたいと思います。

今申し上げたように、ジェンダーのこうした偏見は、今の社会の男性・女性のあり方を変えたくないという立場の人も当然いるわけで、そういう人たちの中にあることが多いのです。しかも、そういう方たちの中には、かなり影響力のある立場で働いていらっしゃる方も非常にたくさんいらっしゃるの、困ったなという感じを持っています。例えば根強いジェンダー・バイヤス、ある一方の性だけが優遇される、ある一つの生き方だけがサポートを得るようなやり方ですと、そうした対等でない関係がどういうところに反映していくのかというと、(今はどちらかといえば、男性もつらいけれども、) 全体的に見れば女性と比べて男性の方が生きやすい面があります。既婚男性の満足度が今一番高いのです。結婚生活における満足度は女性の方がどうしても低い。それを裏づけるデータをあとでお見せしますが。そうすると起こる現象として、女性が結婚・出産をためらう、あるいは介護問題で悩みが生じる、いつもいつも女性だけで抱えて不満がパンクしそうになるという問題が出てきます。あるいは別姓への抵抗、あるいは今、はやりのドメスティック・バイオレンスがあったり、セクシャル・ハラスメントがあったりします。

こんなに簡単にさっと過ぎると申し訳ないので、もう一度、データを基にしてやってみましょう。

○まずは女性の労働力率の国際比較ということです。女性の高学歴化はずっと進んでいますが、高学歴の次に来るのが女性の就業率の高さです。仕事があれば女性はある意味では経済的な自立も可能です。私は必ずしも経済的に自立さえすればいいとは思わない、自立はあくまでも手段であろうと思っている一人ですが、それにしてもやりたい仕事やれないということは女性にとってやはり問題だろうと考えています。

よく日本ではM字型といいます。M字型曲線というのは簡単に言えば、子育てを女性がすべて一身に引き受ける結果です。アメリカは台形です。スウェーデンはもちろん台形です。フランスもそうです。M字型では、子育てのしわ寄せが女性にだけ行くのです。そのベースにはジェンダー・バイヤスがあるわけです。

○さらに、その隣に「ずるいんじゃない」と書いておきました。もしかしたらこれは男性の方から少し異論があるかと思いつつも、あえて出させていただきます。同じように教

育を受けた夫と同級生であった妻の話です。これは朝日新聞への投書です。

「私と夫は同じ大学の同学年生でした。学部は違いましたが、同じゼミで学び、同じスキー合宿に参加して、常に同等でした」、学校教育は常に同等なのです。「今、3歳の長女と9か月の次女がいて、私は専業主婦。夫は仕事ばかりで、残業は毎日。休日出勤はあたりまえで、家事も育児も関係ありません。通勤族で近所との付き合いもなく、私は日々、子どもと顔を突き合わせる生活です」と。ここまでで何がわかるかというところ、分業システムで、夫はほとんど家事・育児には手を出していないらしいということです。

「正直言って『こんなものじゃない?』という気持ちです。今まで男社会がつくってきた『子ども、家族は女がー』という通りにすると、こういうことになるのです。私の友人には、30歳を過ぎても独身の女性がたくさんいます。既婚で子ども1人という人はあまりいませんが、逆にDINKSの人もたくさんいます」、DINKSとは、Double Income No Kids といって、2人で働いて子どもがいないことです。「これからは、男社会の考え方なんて気にせずに、いろんな生き方があってもいいと思います。私は子どもから手が離れたらまた働くつもりですが、それはまだ数年先のことになりそうです」ということです。まさに、いろいろな生き方があってよいわけですが、男女共同参画社会基本法が施行されていますけれども、結局、専業主婦になることを自ら選び取って、納得してなった人でないと、こういう不平不満が出てくるわけです。

意外と気がついていないのですが、女性だからということで家事・育児・介護を押し付けられた方は、非常にストレスが高いということです。これは日本だけのデータではなくて、イギリスでも家庭内だけにいる奥さんたちの不満がたまっているというデータはかなり前から発表されています。1970年代に時事通信社から『妻たちの思秋期』という本が出されました。これはもうお亡くなりになった斎藤茂男さんが書かれた本ですが、エリート男性の奥さんはある意味では離婚ができない。もちろんそれは経済的結びつきとか、離婚はまだまだ社会的にはマイナスの評価があって離婚しない。そうすると、あいかわらずの分業で家族をつくることになり、その結果、一挙に妻の方にストレスがかかってうつ病などになると。

また密室育児はよくないということは最近の常識です。最近、子どもたちが虐待されたり命を奪われたりしていますが、8割までは実の親です。それも非常に大きな問題です。これもジェンダー・バイアスではそろそろ破綻が来ている例になるかなという感じを持っています。次世代の育成については夫婦2人でやると、この人（投書をした人）はおそらく思っているのだろうし、あるいはここでもっといろいろな生き方があってもいい。今の生き方は、そもそも1960年代を中心とした雇用者の家庭を頭に入れて作られたシステムで、それが現在まで継続されているために女性は家庭に入る生き方が社会的な支援を得ています。例えば税制、あるいは社会システムというようなことで。

○そんなことを考えながら世界の様子を少し眺めてみますと、次の表は、ものすごく関心

を持たれている少子化の問題です。昨今は1.34ぐらいです。ここでは女性の労働力率と関連があります。合計特殊出生率の問題ですが、これは25～30歳までの未婚者も既婚者も全部入れ込んだデータです。ところが、これを既婚者だけに限ってみると2.3ぐらいです。まだ2を割らないといわれています。

このデータを見ていただくと、女性の社会進出が進んでいる国は日本よりは子どもをたくさん生んでいます。もちろん授乳とか母乳をあげるというのは実の母親が多いのですが、必ずしもそれだけではないのではないかと。その辺の事情は、私たちのところに、子どもたちを出身国に置いて留学してくる中国からのお母さん留学生がよく示しています。

それに、子育てについてはわからない面がたくさんあります。私たちはいつか息の長い研究ができるのを待っているのですが、実の親でなければ確実に育たない側面はあるのだろうか。あるいは実の親から手を離れて他者に任せても全く大丈夫な特性があるのだろうか。あるとしたらそれは何なのだろうか。そういうようなものが確実にデータとして出されたら、働く女の人は少し安心して働けるのかなという感じがします。別な意味でこの表で(資料参照)専業主婦が多い国、そういうところは子どもの数が逆に少ないというのは少し変な現象だなということです。

○さらに夫婦の生活時間を見ると、これは男性の第2次活動、家事・育児・介護の時間が女性と比べて著しく短い(資料参照)。これは共働きの世帯です。共働きの世帯の奥さんは本当に丈夫ですね。仕事も一生懸命やり、家事もちゃんとやっているのです。ある意味では、体力に恵まれたからこそ、健康に感謝して、社会にも出かけ、家庭生活もやる。しかしこれはもう少しパートナーとシェアする必要がありそうな気がします。

これは専業主婦です。専業主婦の男性はこれです。しかし、これは少しひどいのではないかと思うのは、共働き世帯の男性の方が専業主婦のいる家庭の男性の手伝う度合いよりもまだまだ時間が少ないということです。これはいったいどういうことでしょうか。この辺は考える余裕がありそうです。

別姓の問題も、社会に出る女性が増えるにしたがって自分のキャリアを当然大事にします。そうすると現在のように97.2% (1997年) が夫の姓になっているというのは、ある意味では男性の中に絡め取られている。家意識は終わったにもかかわらず、まだまだあるのではないだろうかというような気もします。最近は名前だけでなく、お墓も別という人が出てきています。

結婚は家と家との結びつきというよりは、個人と個人の結びつきを大事にしたい。個人で私たちはやっていこうという。これはある意味では好ましいことかもしれません。自分たちだけで大事にやっていこうと。だから純粋に愛情で結びついた家族というのはいいですね。

ドメスティック・バイオレンスやセクシャル・ハラスメントも、その基本には相手を対等なパートナーと見ないというところがあります。特にドメスティック・バイオレンスで、

たぶん女性の方が傷つくだらうと思われる、言葉による暴力があります。その中で最たるものは、「いったいだれのお陰で食べていけると思っているのだ」というような言葉です。これは明らかにしんどい話です。相手を侮辱した、無視した話だと思います。

さらに、私が見たデータでは20人に1人が命にかかわるような大きな暴力を受けているということでしたが、昨日、新しい情報が入り、「今は8%ぐらいよ」ということでした。相手を対等な一人の人間とみなしたらとてもそんなことはできませんよね。

セクシャル・ハラスメントもそうです。相手を物化するから適当な扱いをするわけです。よく私たちの身近な世界でも、特に男性の方がセクハラが恐いとかおっしやるのですが、大丈夫ですよ、ちゃんとその方たちは女性も男性も同じように扱われている方々ばかりですから、これまでのように普通にやっていたら大丈夫ですよというようなことをいつも言うのですが、この辺も関係が対等ではないことから出現する訳です。

対等でよりよい関係を求めてというところに登場してきたのが、「男女共同参画社会基本法」(1999)で、日本では17番目の基本法だそうです。基本法というのは、私は法律の専門家ではないので、どのくらい大きな大事なものなのかということを少しチェックしてきました。その分野の国家政策や行政の基本を定める法律の中で、私たちが一番よく知っているのは教育基本法ではないでしょうか。今、教育基本法をどうするかという問題は揺れていますよね。その「男女共同参画社会基本法」というのは、まさに今言ったような、男女に関係する分野の国家政策や行政の基本を決める法律です。特に法律の上下はないと言うのですが、実質的にはその対象分野について、他の法律に優先する性格を持っているのだそうです。方向性のある程度定めていますから、それと矛盾するようなことはみんなだめなのです。

しかし、例えば男女共同参画基本法ができると、また心配する人がいるのです。「一層女性の社会進出が盛んになって少子化が進むのではないか」と。これは逆です。先程笑った方の答えの中に正解があるのですが、昨日の新聞にも書いてありましたが、125年間のお茶の水女子大学の歴史の中で初めて女性の学長が誕生したのだそうです。「少子化が進んでどうですか」というインタビューに答えて、「それは社会が女性の問題に対してきっちり対処してこなかったことが原因の一つでもありますね」と答えていらっしやいましたけれども、まさにそのとおりで、男女共同参画施策が足りない結果として少子化が生まれたと私は考えています。これはこの基本法をお作りになった一人でいらっしやる古橋源六郎先生の考え方です。

まだまだいろいろお話を申し上げたいことがありますが、とにかくこれからの社会は男性も女性もともに責任を持ち、ともに喜びを分かちあい、あるいはプレッシャーもお互いに半分ずつ分かちあいながら、手を取り合って対等な関係で協力していこうとする社会になるはずですよ。男女共同参画社会実現は21世紀の最重要課題の一つといわれています。

最近「世紀末、世紀末」と、あまり言うのは困るのですが、どういうわけか世紀末にジェンダーについて話すチャンスを与えていただきました。そのことに対してとても感謝す

るとともに、私たちが今こうやって自由にものを話したりすることができるのも、100年前からずっとこういう歩みが続けてこられた先輩の女性の方々たちの力によると思います。私たちの祖母の世代はなかなか勉強したくてもできなかった世代ですが、あきらめないでずっと道をつけていらっしゃった女性たちがおられました。今度は私たちが21世紀に生きる世代に道をつけていきたい。そのためにはみんなで考えていきましょう。

このような話を年の、また世紀の最後にさせていただくことができ私は大変喜んでいきます。今日はものすごく冬らしい日に、わざわざ足を運んでくださり、そして最後まで聞いてくださった皆様に感謝するとともに、私にこういうチャンスを与えてくださいました、私が所属している大学にも、とても感謝しております。本当に最後まで聞いていただきましてありがとうございました。

質疑応答

(女性の質問者A) 八重澤先生、ありがとうございました。私は本日初めて聞かせていただいたのですが、ジェンダーという言葉についてはあちこちでよく視界に収めたりしておりましたので、何か男女同権というようなふうを受け止めていました。私のように人間を長く続けております者は全然そういう感覚は今までありませんでした。私自身は、男性・女性とあるのはきわめて、人間界のすることではなくてあちら様のなさることだと思っていました。ですから陰と陽の法則からいけば、男と女というのは陰と陽の法則的な段階があって初めて一つのことがスムーズに完成されるのではないかと思っていました。そういう受け止め方でしたので、いたって生理的に受け止めていたということでしょうか。

それで今日伺いましたので、人間の生活というのは行住坐臥4つの中にそれが分配していろいろな細部に入っていくと思いますので、それこそ結婚する人もいればしない人もいれば、少子化と老人とか、いろいろな現状を呈してきたのはそれなりの中での展開だったと思いますから、今後どういう展開になるのかわかりませんが、私はもうじき八十ですのでもう子も孫もだれもおりませんけれども、今日はこういうところに出させていただいてとても学ぶ点が多かったと思っています。これからはまたそういう機会をとらえて、お召しの日までしかと学ばせていただきたいと思いますと思っています。ありがとうございました。

まだまだ、一晩でもお話ししたいくらいですけれども、いずれかの機会がまた神から与えられるかもしれませんので、そのときを楽しみにしています。あなたは私の孫ぐらいでするので、よろしく願いいたします。ありがとうございました。

(八重澤) いろいろな年代から、エールを送っていただきましてありがとうございます。そういうしっかりされた方がいらっしゃるということは、私たちの世代も負けないように

やろうと思いましたが。またどうぞ、是非、様々にご批判をいただきたいと思います。ありがとうございました。

(男性の質問者A) 質問ですが、1週間ほど前に妹から電話がかかってきて、自分のところの次男が今交際している女性はバツイチの人で男の子が1人いると言うのです。それで私が「来るべき21世紀はバツイチの時代だから、バツイチでなかったら女じゃない。ぜひ頑張って結婚しなさい」と激励しておいたのですが、ジェンダーのお立場から、私の応対のしかたについて、よかったとか何かお叱りであろうが助言だろがお願いしたいと思っています。

(八重澤) すばらしいですね。男女共同参画社会基本法とか、ジェンダーということは、性にとらわれない、その人を見ようと。だから、さまざまな諸条件というようなものをカットして愛情で結ばれる家族というのは、本当に私はうらやましいと思います。なかなかキャパシティが広い息子さんだと思いますし、そういう教育をされるという親は大変なものだなと私は感じました。どうもありがとうございます。

私のアドバイスは下手なので、どなたかアドバイスしてあげてくださいませんか。いかがですか。今の方に。

(女性の質問者A) 私はもらい手もなかったし、見つける能力がなかったもので、現在も1人でおりますけれども。また私が言わなければならないですか。結婚に対するそういうことは苦手ですが、でも先程言われましたように、あくまでも個人というか、その主体性は自分であるということですから、その人がそこで決められて、あとからどうなろうとそれはその人の責任ではないでしょうか。以上です。これは答えにならないかもしれませんが、結婚については私はまるでだめですね。

(男性の質問者B) 非常に初歩的な質問ですが、ここで言っている生物学性差というものと、社会・文化的な性差といいますか、そちらは同じものではないというようなご説明があったのですが、それぞれが与えるというか、例えば生物学的性差が与える社会的・文化的な性差みたいなものに及ぶものが、全くこれを切り離すことができないのではないかと思うのですが、そのあたりを教えていただけませんか。

(八重澤) 全くそのとおりです。日本文化を見てみると、「性」と書くのです。特に私は心理学をやっていますから、心のベースには必ず体があるわけです。それがどのような関係にあるのか。それについては今非常におもしろい本が出ています。私はまだ全部読んでいませんけれども、『ブレンダと呼ばれた少年』というタイトルです。これはアメリカでベストセラーになったそうです。

非常に単純なのですが、一卵性双生児の男の子が生まれて、片方の子が割礼の失敗で生殖器を切り落とされてしまったのです。それで両親と先生とみんなで相談して、その子には精巣を取って女性ホルモンを投与し、女性性器を作って、「ブレンダ」という名前を付けました。ジョンとメリーがわかりやすいですから、ジョンとメリーというふうにしますが、同じ遺伝子を持った子を育てたのです。あるアメリカの研究では思春期までですが、そこまでは完全にメリーちゃんという元男の子はメリーとして適応していました。しかしその後、その子が「メリーはいやだ」ということで性をまた変えて女性と結婚しているのです。それがアメリカで今ベストセラーになっています。

この一例をもってすべてにあてはめることはできないとしても、どこまでがベースとしての生物学的性の影響がありどこからが違うのか。これはきわめて大事な問題であろうと私は思っています。いずれにしても、後天的に作られたジェンダーと生物学的・解剖学的性差の協働については慎重な取り扱いが必要であると心理学では考えています。今度はヒトゲノムが登場するかもしれませんね。暗号を解読していかないといけないかもしれません。

(女性の質問者A) また原点に戻ってしまっ、少し八重澤先生よりアンチ的なことに目が向いたりするのですが、人間が男性と女性といるということは、もっと前段階の動物、例えばミミズにはそういう区別がないですよ。1つ分裂して、また1つのそういうものを作っていくということがあります。そうすると男性と女性というものを作られているということは、それなりの意義があつてしかるべきではないかなと私は思っております。これを人に押し付けるつもりはありませんが、そのような生き方をさせていただこうと心に念じているのです。ジェンダーがあつても、男性がどうでも、女性がどうでも、どうでもそういうことはすべて原点に戻れば何ということもないわけですので、そういう生き方もまた大切かなと思っています。

男性の方というのは女性のようにぐちゃぐちゃおっしゃいませんよね。黙ってやってらっしゃいますから、この時代は男性受難の時代ではないかと若い方々と話をしたりしてい

ます。男性の方々ももう少し、と言ったらジェンダーでしょうかね。



(八重澤) 補完する生き方を選ぶ人はいいのです。補完しあうことも、あるいはお互いに独立して緩い連合を組むのも、男女共同参画社会というものはどちらでもいいと思います。だから、今までのように相互補完する生き方だけをしなさいということ

から解放しているわけです。

(女性の質問者A) そのようにとらえたいと思います。

(八重澤) 今おっしゃったように、男性も受難だけど、女性もある意味で受難なのです。従来のようにもう逃げ場がない。これから新しいモデルをたぶん私たちが作り上げて、そして次の世代の女性たちを引き上げていくのだと思います。教育はすごく大事ですから、教育の場においてジェンダー・フリーな教育を目指しています。そうすると教育環境を整えようということで、私たちの大学も、もっと積極的に、性差にとらわれない教官の選考を行うなどなどを頑張っているはずなんです。

(女性の質問者A) ありがとうございます。

(男性の質問者C) 私は今週の月曜日に県議会を傍聴に行きました。八重澤さんがひな壇にお一人おられ、そのときに男女共同参画社会に関する一般質問を3人ほどされたと思いますが、南側の若い県会議員の方もかなりまだジェンダー意識が低いような印象がありました。知事さんは教科書的な答弁をちゃんとされていたのですが、一度県議会の人を前にして、八重澤さんが今日のようなお話をされると、だいぶ手っ取り早くことが進むような気がします。

(八重澤) たぶん国策に対する反対は明からさまにだれもしないと思うのですが。これは男女共同参画基本法（が成立したとき）の写真です。ここには天皇や閣僚の印鑑が押されています。これは10部ぐらいありますので、よろしかったら、どうしても持っていきたい方にさしあげます。発言された方はどうぞ優先的にお待ちください。

今日は最後までジェンダーを学ぶ会に男性の方がこんなに半分も来てくださり、こういう会で話させていただくことはすごく珍しいのです。それは個人的に私が頼りないのでちょっと見に行ってみようかなということも含めて、そして温かい質問を出してくださったりして、私も非常に学ぶことが多かったです。本当にありがとうございました。

ひと（女性）とひと（男性）

共に自分らしい生き方を！—ジェンダーを初めて学ぶ人のための入門講座—

八重澤（松下）美知子
（金沢大学留学生センター）

1 性差についての発達心理学

- ・性差研究の流れ——「差異」の測定から「差異」の形成へ
生物学的性差
社会・文化・心理学的性差
- ・ジェンダーの形成をめぐって
家庭／学校／社会／文化

2 現代社会とジェンダー

- ・現代社会の特徴——「個人化」への傾向
産業構造の変化・情報化・国際化・少子高齢化
教育機会の拡大・女性の職場への参入
- ・ジェンダー・バイアスからのプレッシャー
「らしさ」へのこだわりととらわれ

3 ジェンダー・フリーのための継続的な努力を

- ・「ジェンダー」についての偏見
- ・根強いジェンダー・バイアス——「対等」ではない関係がもたらすもの
結婚・出産へのためらい／介護問題
別姓への抵抗
DV（ドメスティック・バイオレンス）／セクシャル・ハラスメント
- ・対等でより良い協力関係を求めて——「男女共同参画社会基本法」の成立

<用語解説>

- ・ジェンダー 生後の環境（社会・文化・歴史）のなかで形成される性別の総体
なお、スピーチの中では、「性別に関する」、「性別による」等の意味
- ・ジェンダー・バイアス 性別に関するステレオタイプ；固定的な決めつけによる偏見
- ・ジェンダー・ギャップ 就学率・専攻分野あるいは賃金など性別による男性・女性の格差
- ・ジェンダー・フリー 性別にとらわれない考え方や取り組み
- ・「男女共同参画基本法」（平成11年 6月23日施行）に盛り込まれたジェンダーの視点（第4条）「社会における制度または慣行が性別による固定的な役割分担等を反映して、男女の社会における活動の選択に対して中立でない影響を及ぼすことにより、男女共同参画社会の形成を阻害する要因となるおそれがあることにかんがみ——（略）」

表 1 ニューギニアの3部族の文化型 (Mead, 1935)

| 部族 | 部族名 | アラベッシュ | ムンドグモール | チャムブリ |
|---------------|------|--|---|---|
| | 居住地域 | 山 地 | 河 川 | 湖 |
| 文化の全体的特徴 | | 女性的 協同的な社会 男女老幼の差別が少ない | 男性的 かつて首狩人肉食の習慣 があった 好戦的・攻撃的 | 男女の役割がわれわれの 社会と反対 女性が生産的労働に従事 し消費の実権もにぎる 男性は美術工芸祭祀に従 事する |
| 男女関係 | | ひかえめに反応する男女 の結婚が理想 性的欲求は強くなく性的 葛藤はない 家族間に強い愛情的・相 互依存的な結合がある | はげしい攻撃的な男女の 結婚が理想 性生活は積極的 男女間に権力と地位、優 越についての争いがある | 優越的・非個人的・支配 的な女性と、無責任で 情動的・依存的な男性 との結婚 性的にも男性が従属的 |
| 育児・しつけ | | 男女とも子どもの世話を する きびしいしつけはほとん どしない 子どもには寛大でむしろ 溺愛的 子どもの成熟を刺激しな い | 子どもに無関心・拒否的 子どもを残酷に扱いきび しい罰を与えるが、し っかりしつけをするの ではない 子どもの成熟を刺激する | きびしい教育・しつけは しない 母親は身体の保護と授乳 以外、子どもと偶然的 な接触しかしない 1歳からの養育は父親が うけもつ 児童期以後にきびしい統 制がはじまる 女兒は成熟を刺激され、 男児は刺激されない |
| パーソナリ ティ特性 | | 自己を主張しない 他人に愛され助力をうる ことに安定を感じる 非攻撃的・協同的・愛情 的・家庭的 温和・親切 | 自己を強く主張する（と くに女性） 所有欲とリーダーシップ への感情が強い 攻撃的・非協同的 残酷・冷酷 粗暴・尊大 | 女性は攻撃的・支配的・ 保護者的で活発・快活 男性は女性に対して臆病 で内気で劣等感をも ち、陰険でうたがい深 い |

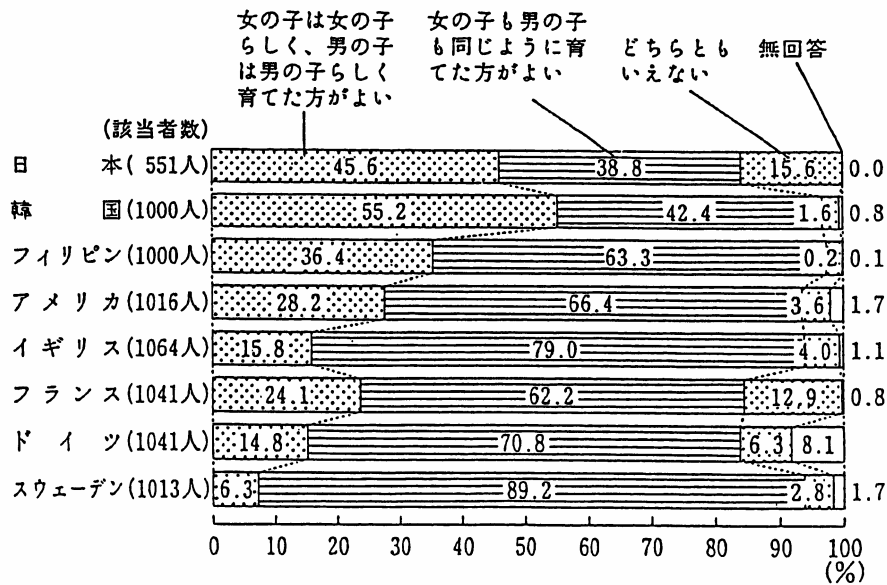


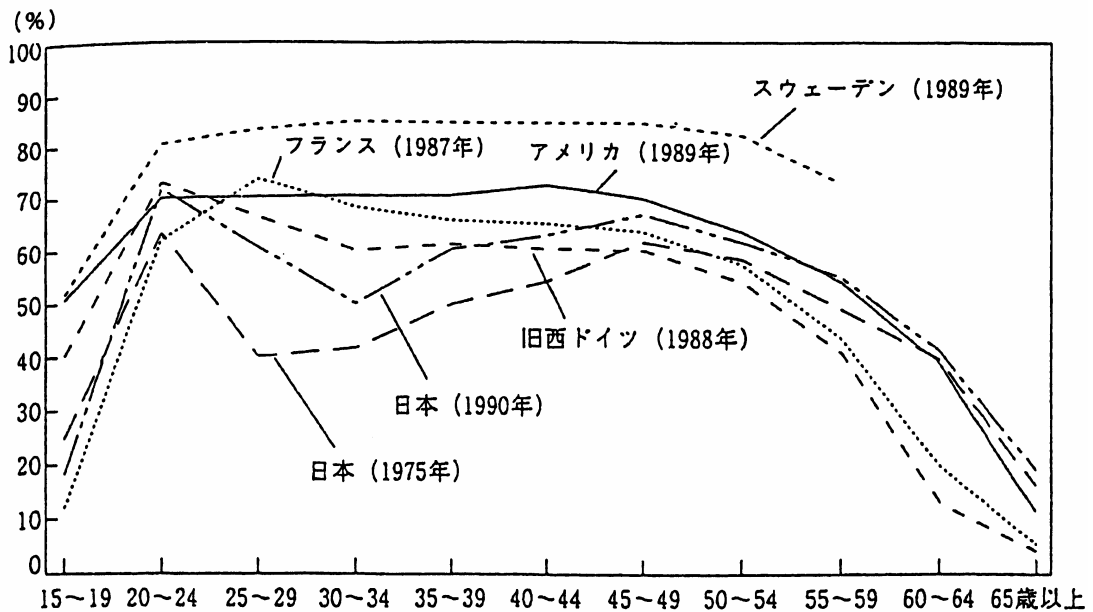
図 1 「女子は女子らしく、男子は男子らしく育てた方がよい」という考え方について
(東京都生活文化局, 1994)

表 1 性役割のステレオタイプ (日本)
(柏木, 1967)

| 男性に望ましい特性 | 女性に望ましい特性 |
|-----------|-----------|
| 背が高い | 気持ちの細やかさ |
| 活発な | おしゃれ |
| 積極的な | 行儀のよい |
| 経済力のある | 愛情豊かな |
| 意志強固な | かわいい |
| 理性的 | 従順な |
| 頭が良い | 容貌の美しい |
| 個性的 | 男性に依存的 |
| 自信のある | |
| 女性をリードする | |
| 現実的 etc | |

表 2 性役割のステレオタイプ (アメリカ)
(ハイルブラン Jr., 1981)

| Masculinity | Femininity |
|-----------------|------------|
| 攻撃的 | 思いやりのある |
| 独断的な | 協力的な |
| 独裁的な | 依存的な |
| 自信に満ちた | 移り気な |
| 支配的な | 寛大な |
| 進取の気性に富んだ | 友好的な |
| 力強い | 謙遜な |
| ハンサムな | 服従的な |
| 遠慮なくものを言う | おく病な |
| 勤勉な | あたたかい |
| 厳格な | 心配性 |
| 筋骨のたくましい etc | |

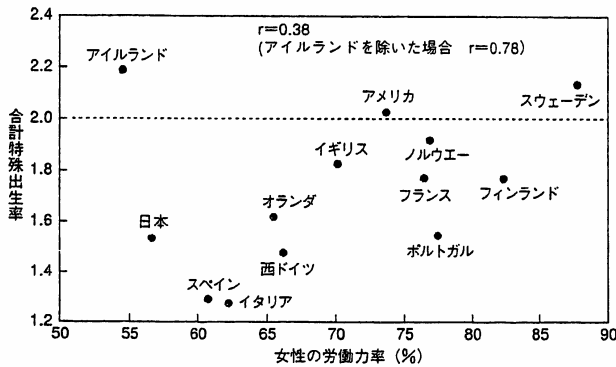


(注) アメリカ, スウェーデンの区分のうち, 「15-19歳」の欄は, 「16-19歳」として取り扱っている。

資料: ILO "Year Book of Labour Statistics 1989-1990" および総務庁統計局「労働力調査」
坂東真理子編著「図でみる日本の女性データバンク」大蔵省印刷局 1992年

図 女性の労働力率の国際比率

●女性（25～34歳）の労働力率と出生率の国際比較

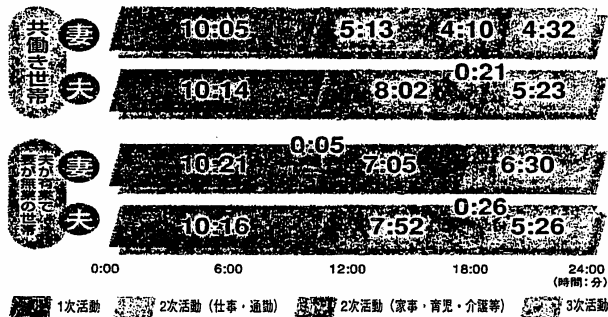


女性（25～34歳）の労働力率の高い国では、合計特殊出生率も比較的高くなっています。

注：「合計特殊出生率」
1人の女性が生涯の間に産む子供の数

資料出所：OECD, Labour Force Statistics, 1991.
出典：先進諸国の人口問題（阿藤誠編）
東京大学出版会 1996

●夫婦の生活時間



男性の2次活動（家事・育児・介護等）の時間は女性と比べ著しく短くなっています。

注：「1次活動」とは、睡眠、食事のような生理的に必要な活動、「2次活動」とは、仕事、家事のように社会生活を行う上で義務的な性格の強い活動、「3次活動」とはこれら以外の各人が自由に使える時間における活動をいう。また、「家事・育児・介護等」には「看護」、「買物」が含まれている。

資料出所：総務庁「社会生活基本調査」（平成8年）

《投書欄》

ずるいんじゃない

土浦市 T・K（主婦・31歳）

私と夫は同じ大学の同級生でした。学部は違いましたが、同じゼミで学び、同じスキー合宿に参加して、常に同等でした。

今、三歳の長女と九カ月の次女がいて、私は専業主婦。夫は仕事ばかりで、残業は毎日。休日出勤は当たり前で、家事も育児も関係ありません。転勤族で、近所との付き合いもなく、私は日々、子供と顔を突き合わせる生活です。

正直言って「こんなの、ずるいんじゃない？」という気持ちです。今まで男社会がつくってきた「子供、家族は女がー」という通りにすると、こういうことになるのです。

私の友人には、三十歳を過ぎても独身の女性がたくさんいます。既婚で子供一人という人はあまりいませんが、逆にDINKSの人もたくさんいます。これからは、男社会の考え方なんて気にせずに、いろんな生き方があって良いと思います。

私は子供から手が離れたら、また働くつもりですが、それは、まだ数年先のことになりそうです。

〔朝日新聞 一九九一・三・七〕

ある休日の屋下がり。所用があつて、私鉄のローカル線に乗った。ローカル線というだけでもあつて、車内は比較的すいていた。1歳くらいと思われる幼児を運れた30歳前後の家族の3人が乗ってきた。なんとなく、向かい側に座ったその3人連れに、私の視線はひかれていた。

20〜30分の同じ旅である。しばらくすると、車主のほうで幼児のオムツの交換を始めた。夫人はいろいろ、横で週刊誌に夢中になっている。男は慣れているのか、馴らされているのか、手つきもよく、時に終えた。

ローカル線で

ちょっとすると、今度はほ乳びんと、ポットのお湯を出しての授乳である。これも横の夫人は知らん顔で、足を軽く組んでの週刊誌。

ここでは、「男女同権」も「男女雇用機会均等法」も関係ない。どうして2人が協力してやれないのか。そう思ったのは、戦中、戦後を生きた男の卑なる郷愁なのだろうか。

折から、参院の「共生社会調査会」が、夫や恋人からのドメスティック・バイオレンス（家庭内暴力）の実態調査を実施し、被害にあった女性への支援体制を確立するといふ。それは、それで結構なことではあるが、なにか前述の車内風景と重なって複雑な気持ちになる。

奈良県

70 講師

子供が幼かったころ、つれあいや子供とともによく外出した。日曜はマンションで子供の世話を追われていた私たちがたつて、たまの外出は、オムツはもとより、2着分くらいの着替え、気晴らしのためのオモチャや本などがかなりの大荷物になる。

外出先では、私もよくオムツ替えをした。電車のなかでもオムツを替えたことがあるが、大重のウンチをして、オムツカバーからはみ出したりの時はつれあいや2人がかりでないと大変だが、オムツコだけの場合は、私一人で替えたものだ。7月29日の本コラムの投稿を読んで、そのころの私たちの姿が重なった。オムツを替える夫

オムツ

を哀れに思う人もいるのだと感じ、かえってつれあいが少し可哀相になった。

もし、夫がすぐそばにいるにもかかわらず、妻が一人で子供の世話をしていたとしたら、この方はどう思われたらう。それでも、一人で世話をしていることに違和感をおぼえられたらうか。私たちの場合、オムツ替えなどは、気がついた方がいたので、この方が見られた夫婦もまたまた夫の方が気づいて世話をしていたのではないかと思う。

わずかな時間の出来事でも、「男女同権」も「男女雇用機会均等法」も関係ないと言われると、私としては何とも息苦しい、生きにくい世の中を感じてしまう。

京都市

40 自営業

柏木恵子 1993 父親の発達心理学 川島書店
 岡本祐子・松下美知子 1994 女性のためのライフサイクル心理学 福村出版
 柏木恵子 1995 女性の発達 現代のエスプリ 至文堂